

## ■原宿にて徒然に(その1:師なるひとに)■



1992年3月21日

Prof. 吉野 要先生

前略

お懐かしゅうございます。姉から、先生のお言伝を戴きました。お心遣い嬉しく、恐縮いたしております。本当に、長らくご無沙汰しておりますが、吉野先生のお名前を耳にしまして、すぐに懐かしいお顔がパッと目に浮かびました。「愛知県立女子大学・児童福祉学科」在籍中は、大変お世話になりましたのに、卒業後何らご挨拶もなしにこれ迄過ぎてしまいまして、心苦しい限りです。

自分が何を求めているのか、解るのに随分時間が掛かります。自分の身に起きた諸々のこと、「京都大学大学院・教育学部」での心理臨床やら、ロンドンでの研修のことやら、それも今ようやくにして自分の中で、あれはこうで、それはああでと、咀嚼し始めたような具合です。いずれにしても、原点と申しますと、何やら言うのも気恥ずかしいことですが、例の私の《卒論》、【児童分析の治療原理についての一考察】なわけです。本出祐之先生が指導教官でしたが、あの当時京都大学から赴任されたばかりで助手でいらした先生からもたくさんのお智恵を拝借いたしました。ここに至って、ああやっぱりするのかなかと得心することがあり、結構自分を信じていいような気分になったりしております。解りたいことが、そして知りたいことが、ああ解った、そうだって言える状況に辛うじて身を置き続けられていることは、やはり幸せなことに思えるわけでして、これはこれで相当に‘我がまま’に生きてると我ながら自負しておりますような次第です。

臨床の実績を公表することには未だ躊躇があり、もう少し時間が掛かりそうですが、個々人の‘こころの育ってゆく軌跡’に立ち会っているという興奮を覚えることが時折あります。一応私の原宿での個人開業の《ご案内資料》を同封致しましたので、お暇な折にでもご覧戴きますように。

いつの日か、お目に掛かれると嬉しいのですが。ではご機嫌宜しく。

敬具

山上 千鶴子



1995年5月31日

Prof. 本出 祐之先生

長らくご無沙汰いたしました。いつまでもお元気でいらして下さるものと安心しておりましたら、此の度の突然の阪神淡路大地震。西宮在住の先生の御身にもしものことがあればどうしようと大変に気を揉みました。Mrs.I.M.さんの方からの情報網で、やがて先生のご無事を知りまして、安堵致しました。どんなにご不自由な思いをなさいましたことか。先日お電話を差し上げました折の先生のお言葉では「教え子に助けられ、教師冥利に尽きる」ということでしたが、私もこんな時先生の身近に居ましたのなら、何かお役にも立てたかも知れませんが、自分が腑甲斐なく思われたことです。また電話の折に、そのお取り込みの大変な最中に、ご自分のことよりも、この歳月まるで音沙汰無しの私がどうしているやらと案じていただきましたようで、ご親切にも私の近況などお訊ねくださいませ、私、本当に恥じ入りました。唯々仕事一筋でして、日常が平穩無事と言いますか、これといった

華々しいことのない、極めて地味な生活をして  
おりましたものですから、ついついどなたにも筆無  
精になってしまっております。しかし着実に我が  
道を歩んでいるのには違いありませんで、これは  
これで結構‘我がまま一筋’の人生だと思ってお  
ります。

両親はお陰さまで健在でして、5年前  
に舞鶴から姉夫婦の住む滋賀県〇〇の琵琶  
湖畔のマンションへと移り住みました。二人とも  
驚くほど適応のいい方なものですから、それぞれ  
に新しい土地柄にも慣れ、快適に暮らしており  
ます。私の方も休暇で親元に戻るのが随分と  
楽になって喜んでおりますし、姉夫婦そして宇  
治におります妹の家族とも行き来が増えました  
から、家族的な絆を喜びとすることがいっそうで  
きるようになりましたこと一安心なのです。

いつぞやロンドンで先生にお逢いいた  
きました、私の姉の Q 子なのですが、J.教授の  
お引き立てがあり、つい最近☆☆女子大學に  
助教授として就任しました。当初、本人は学生  
の指導など向いていないようなことを言ってお  
りましたけれども、なかなか意外にも同僚の先生  
方やら学生たちの受けも良いらしく、とても機嫌  
良くしております。実はかなり前のこと、私がまだ  
ロンドン滞在中に、かつて彼女の大学時代の  
恩師でいらした W.教授が突然の不慮の事故で  
ご逝去されて以来、私は姉の Q 子の行く末  
が些か気懸かりでございましたけれども、いつし  
か時間は流れ、彼女は彼女らしく人生を実に  
面白く展開しているといった印象でして、安堵し  
ております。結婚しそうななかった彼女がひょんな  
ご縁で☆☆児童相談所でケースワーカーをして  
いた方と結ばれて、その方が仕事の傍ら絵  
を描かれまして、抽象画というか墨絵風のなか  
なか風趣に富んだ画風でして、ここ最近何年

来も続けてニューヨークで個展を催すなど、目  
下躍進中なのです。姉もその彼に伴い、何と  
意外や意外、健気にも(!)‘画家の妻’をやっ  
てますようで…。その活躍ぶりというのが案外と  
好評でして、ニューヨークでの交遊関係の広がり  
は眼を瞠るものがございます。こうした成り行き  
は想定外といいますか、家族としては愉快なが  
らも驚嘆しておりますような次第です。

さて、いつぞや先生にお届けすること  
をお約束しておりました【現代のエスプリ精神分  
析の現在】が予定より大幅に遅れまして、ようやく  
出版されました。私の拙い文章が載っており  
ます。どうぞお目を通してくださいますように。しかし  
実はと申せば、私自身この本のページをあちこ  
ちめくりながら、内心複雑な心境なのです。勿  
論小此木啓吾先生は得意満面なのですが、  
私としては、ああ、こんな風に日本に「精神分  
析」が導入されるのではどうしようもないと頭を  
抱えてしまうのです。どうしてこうも‘主体’が希  
薄なのか、曖昧なのか、そのお粗末さ加減には  
途方に暮れます。かく言う私にしてみてもしかりで  
して、そろそろ私もようやくにして公に“声”を持とう  
と覚悟を固めつつあります。語るべきものがあり、  
それを聞かせたい人がいるということが、恐らく  
幸福というものなのでしょうから……。

此の度の【現代のエスプリ】の執筆依頼  
だけでは済まないだろうと思っておりましたら、や  
はり小此木先生から、更に小寺記念財団主  
催(彼が理事)の『精神分析セミナー』での講演  
依頼がございました。私は「日本精神分析学  
会」にはまるで背を向けた恰好でこれ迄おしま  
したが、まあこの際皆さんのおやりの精神分析の  
‘お勉強’を試みるのもいいかなと思ひまして、  
他の講師たちのお話もただで聴かせてくれると  
いうことですし、私の出番は最後、つまり来年の

3月ということにさせていただき、毎月一回のセミナーに出席しております。小此木先生はお喜びです。当然毎回意見を求められますものですが、まあこの頃は私も臍を固めて、言いたいことを言っております。

実は帰国後のここ十年来、まあ言うなれば‘潜伏中’でありました私ですけれども、最近になって、俄然外へと動き始めております。

一つは、新宿の『朝日カルチャーセンター』通いでして、差し当たり、高木幹太牧師の「旧約聖書のかんどころ」を聴講し始めました。ユダヤ民族の歴史・物語の凄みを味わって、圧倒されております。

もう一つが、『語り塾』。「沼田曜一」という俳優さんがおられまして、お若い頃から全国行脚して地元には伝わる民話を採集なさったり、「民話の語り」をライフワークにされておいでです。その方の主催なさる『語り塾』の第一期塾生になりまして、張り切っております。民話・語りの世界との出会い、これは私にとって日本或は日本人との出会い直しの意味を持っていると言えましょう。私の引っ込み思案な性格を矯正するのにもよろしいみたいですし……。セリフが覚えられず四苦八苦なのですが、自分が字面(筋)を追うだけで、頭の中に“情景を描く”ということがまるで出来なくなっていることに気づかされ、啞然としたのです。とにかくいろいろと気付かされることが多く、退屈致しません。それらの2つは、まるで奇妙な偶然的取り合わせと自分では思っておりましたが、案外どうも私の中で今後「ユダヤ心性と日本人性との弁証法的対話」として発展しそうに思われまして、期待しているところです。

先日お電話しました直後に何か先生宛に小包でもお送りするつもりでございましたところ、

当分「宅配便」は受け付けないとあちこちで言われ、そのうちにと思っている内に時がこんなに過ぎてしまい、ほんと間が抜けてて、申し訳ございません。ほんの気持ちですが、ここにお見舞いを同封させていただきました。震災は惨いものですが、なお被災の苦しみの中で、知り合うこともなかった、そして忘れかけていた人たちにこうして会えたという喜びがあればこそ慰められるのではないかと試してみたりするのです。

どうぞお元気でいらしてくださいませ。

千鶴子



1995年11月26日

#### 沼田 曜一先生

常日頃、先生にはご指導いただき、誠に感謝に耐えません。そもそも心理臨床に携わる日常において、自分の語ることばに‘いのち’が欲しいと念願しておりました、その一念で、偶然眼にした新聞紙上掲載の「語り塾・塾生募集」の広告に飛びつきましたような次第でした。からだも声も、まるで基本が備わっていない私が、身の程知らずと承知しながらも、ただ闇雲にお稽古を重ねてまいりまして、その成果はともかくとしまして、お蔭様で、先生の常日頃おっしゃる「大地のぬくもりのような民話」の魅力に私もすっかり虜になっております。

先生からこれ迄にどんなものを頂戴したのかは、ちょっと当分‘内緒’ということで、ここであれこれ申しませんが……。何故ならば、それは「尚も、続きあり」でありますから、まだまだこれからだぞーと思いつつ、さらに驚きと発見を待ち受けてゆきたいと思っておりますから……。

でも既にはっきり一つ‘発見’がござい

ました。実は、日本の「精神分析」のサークルでは、私はなにやら‘孤高の伝説の人’とやら‘原宿仙人’とやら噂されておりまして、生来の引込み思案から、これまで講演依頼はすべてお断りしてまいりましたのに、つい先日お招きにお応えし、皆さま方の「山上先生に一体何が起きたのか?!」の好奇の眼差しの中で、お話ししてまいりました。まあ言わば、‘デビュー講演’と申しますか……。そこでお話ししながらも、沼田曜一先生が私の‘隠し味’(!)になるといった感慨をふと抱きまして、大変に嬉しゅうございました。いつぞや「寄せ書き」にも綴りました通り、『沼田曜一』ブラボー! 『語り塾』ブラボー! なのです。それも益々に……。

さて、本題の【ことばの花束】の件ですが。実はこの頃私も、先生に倣いまして、時折身近の出来事から、ああ、これはちょっといい話だなというのに遭遇しますと、それを親しい友人らに宛てて書き綴って送るようにしております。特に今ひどく気掛かりな方が一人いまして、少壮気鋭の哲学者なのですが、「悪性リンパ腫」で病床にありますのね。それですから、「あなたに死なれちゃあ、いやだあ!」と、せつせとラブコールを送ることにしておりますの。

【ことばの花束】の連想から、その昔私がミッション系の高校におりました当時、「霊的花束」というのがあったのを懐かしく思い出されました。これは例えば病氣見舞いとか、もっと一般的なのは霊名の祝日などにですが、その相手の方に、祈祷書の中から天使祝詞とかロザリオ詠唱などを唱えた回数とか、或は聖体訪問した回数などを書き込んだカードを差し上げるというものでしたの。私はクリスチャンとして洗礼を受けは致しませんでした。この‘祈る’という行為の持つ力に魅了されるものがあったのは確かと言

えましょう。

いつぞや沼田先生から【ことばの花束】についてのご説明をいただき、「心を幸せにする、生きていて良かったことを基本にしたものを話した何か」という趣旨には、とても感銘を受けました。そうしたお話しを通して祈りの熱い想いが伝わり、そして人の輪(和)が広がるということは何て素晴らしいことでしょう。

ここに同封致しましたものは、一応く話の花束コンクールへの参加を募りますという先生の呼び掛けに応えるものではありませんが、どうも本来の趣旨に沿うものかどうか、些か心もとない気が致します。実はこれはいつぞや先生に率いられて、語り塾の塾生の皆様方とご一緒ましての《山野草の会》の遠出の折に訪れた「猿橋(山梨県・大月市)」の印象がふいと私の脳裏に浮かんだものでして、面白いと書き留めてあったのです。それが驚いたことに、それから間もなくして、【ことばの花束】に触れられてご説明くださった折りに、先生はふと何げなく「たとえば、この前の《山野草の会》に行ったときに、道端の花が美しい女の人の顔に見えたとかね……」と、冗談っぽくおっしゃったのですよね。これはまことに‘妙なる一致’ではありませんか。それで私はこれをぜひ先生に、“ちょっと内緒話”ということでお送りしたいと思っておりましたが、どうも気恥ずかしくて、そのままにしておりましたの。まあ言わば主観に強く彩られた幻想的なお話ですから、とても【話しの花束】にふさわしくないと先生がご判断なされても結構なのです。ただこの際、先生のお眼に止まれば嬉しいと思ったのですから……。

それでは、今週土曜日のご公演で、ようやく待望の沼田先生の語り・「ふるさとの人間ばなし」をお聞かせいただきますことに心躍らせながら……ご機嫌よろしく。 山上 千鶴子

<追伸>:先日、沼田先生が審査委員長をなされた《第4回わたぼうし語り部コンクール》ですが、深い感銘を覚えました。ご出場なされた障害者の皆さん方どなたも、実に素晴らしかったですよね。グランプリの栄誉に輝いた脳性麻痺の男性の方は勿論、どなたも渾身の力を振り絞っての語りでした。先生のおっしゃいました通りです。障害が‘個性’になっていて、それが存分に発揮されているからこそ、こちらの胸を打つのですね。

それにしてもご立派な舞台でしたこと。殊に照明の効果には感心致しました。それぞれの語りの個性を存分に引き立たせてましたよね。実は私、先生のお作の中でも「天人の嫁」が一番気に入ってますのね。でも今の自分の力量ではとてもとても息が続かないでしょうからと、棚上げのままでおりましたの。それがふと、私ももしかしてこんな晴れがましい舞台でいつか「天人の嫁」を語れることがあるかしらって、そんな途方もない夢心に浸りながら、一人夢心地でおりましたのね(！?)。

しかしそれとは別に、後でふと思ったのですが、本当はもっと普段着のままの皆さんの語りを、それもたくさん、下手とか上手とかではなくて、いつもの姿のままでいいから、たくさん‘わたぼうしの語り部たち’の語りをもっともって聴きたかったという心残りがちょっぴり致しましたの。今回ロビーで展示されておりました、彼らの無垢にして天衣無縫なる「書」には、おお凄いい！とただただ圧倒されましたけれども、いつか『たんぼぼの家』にも訪ねてみたいものだ、新たな夢をも抱いたようなことでした。それ迄には、私の語りも彼らに見劣りしないぐらい味のあるものになっていなくてとは、益々やる気が出てまいりました。大いに励んでまいります。

.....

## 「話しの花束」

創作・山上千鶴子(1995/6/3 記)

### ◆ジャスミンの女 ◆

ジャスミンの花って、ご存じかしら？

ええそう、小さな白い花をいっぱいにつける蔓科の植物。ほら、春先になると、花屋さんの店先に鉢植が並べられてあるの、見掛けたことないかしら？

随分昔なのだけれど、ベランダにジャスミンの鉢植を一個置いてたことがあったわ。部屋の中だと、その白い小さな花は、妖艶な、何とも物狂おしいほどの匂いを撒き散らすものだから、ついに辟易して、外へ出してしまったんだけど……。そして、それもいつしか赤茶色の枯れた蔓になって、やがて干からびてしまったの。何故かほっとしたのを覚えてる。たぶんね、恋を知らず、男を知ることのなかった私が、そのジャスミンのあまりにも露骨でひたむきな“女”を持って余したんだと思うの。男を慕い恋い焦がれ、想いは虚しく宙を彷徨う。その哀れさにいつそのこと枯れてしまった方がいいって、どこか心の隅で思ったのかも知れない。そしてそのまま長い間、そのことを捨てて顧みなかった私であったのに……。

ところがね、私、ひょんなところで、またそれに遭遇(であ)ってしまったの。初夏の或る一日、<山野草の会>で山梨県の『猿橋』を訪れたときのことだったわ。遥か下の溪流のせせらぎを耳に、橋の上に一人佇んでいたら、どこからか微かにかぐわしい匂いが漂ってきたものだから、何げなしに橋の袂の楓の樹の方を見遣ると、その崖沿いの苔むした太い幹にびっしり絡みつくように蔦(つた)がうっ蒼と生い繁り、そして、そうなの、ジャスミンの白い花が、点々とそこかしこ辺り一面咲き誇っているではありませんか。屋下がりの緩やかな日差しを青々とした楓の葉が遮り、その木陰に抱かれて、ジャスミンはまるで、女が愛に溺れたあとの

けだるさを引きずって、男の腕にからだを絡ませながら、うとうとと午睡を楽しんで憩っているかのようだったわ。そのうちにふと、その“ジャスミンの女”は微かに瞼をあげて、物憂げに白い面をこちらへ向けるような気配がしたの。私は息を呑み、気圧されるようにして、思わず「あっ失礼、お邪魔でしたわね」って、心の中で呟いたの。そしてそそくさとその場を去りながらも、私、変にウキウキ嬉しかった。「ああ、良かった。貴女、会えたのね・・・！」って、彼女にいつしか語っていたのね。私の中の涸れて顧みられることもなく終わった‘女’、そしていつの間にか霞んでしまった「私を愛してください！」の物狂おしい思い。でもそれが今、思いがけないところで、こんな風にして誰かと巡り会っているのを眼にしたものだから・・・。

今でも夜更けに、寢床の中で一人ふと夢現に想うことがあるの。いつかの『猿橋』の溪谷。その深い清涼な闇がジャスミンの馥郁とした薫りに浸されているのを・・・。それからね、突然、“ジャスミンの女”が一人のバレリーナに変身するの。コスチュームの裾をヒラヒラとさせながら、彼女が媚びを含んだ笑みで楓の樹を見上げると、楓は高揚してか幾分赤らめた顔をしつつ、彼女の愛に応えるかのように、彼もまたいつしか颯爽とした踊り手になっているの。そして溪流のせせらぎを背景に、二人はパ・ド・ドゥを踊り始めるのね。男は女をいとしげに腕に抱えている。それから、女はスイと男から離れ、空中にクルクルと舞いあがる。男がそれを追い掛ける。やがて女は男を振り返り、手を差し延べる。男はその腕を掴み、クルクルと女を回転させながら、再び彼女を自分の両腕の中に憩わせる。安らぎと満足の溜息・・・。そんな風にして二人のパ・ド・ドゥは、夜を徹して続いてゆく。そして時折ね、「ああ、私には貴方がいる・・・！ もっと愛してください、もっと・・・」という女の声が漏れ聞こえてくるの、溪谷に聳る水のせせらぎの音の合間に・・・。

《補足》：この拙文は、画家クリムト（Gustav

Klimt）の作品「アダムとイヴ」に触発されて綴られた、言うなれば私の中の‘イヴ’へのオマージュでもあります。



1997年1月18日

Dr. A.S.先生

此の度頂戴いたしました先生からのお手紙には、私本当にとても久し振りに人の情というものに深く心揺すぶられた、そんな思いがございました。私などのような若輩者のためにもこのような真心のこもった‘応答（レスポンス）’を厭わない、そうした先生の真摯さに驚きと感動がズシーンと胸に響いたのでしたのね。

普段私どもは職業柄、どうしても自分が自分だけのものではないところで生きているわけでした、それはいいとして、得てして自分が自分のものでもあるということを忘れがちなのですね。従って悲しいことに、まあ大概の皆さん、‘個人的 personal な自分’というものが殺がれておいで印象はございませんかしら。私は困ったことに‘群れる’ということにどうしようもない羞恥心（忌避感）を抱く癖がございまして、私の側で逢いを狭めているという反省は十分ございますものの、魅力的に感じられるだけのその人固有の‘声’を聞くことがいかに乏しいかに日頃大いに失望しておりましたの。それでどなたともついついご無沙汰しがちで、既に“忘れられた人”になっていることを良いことに、独り暮らしの気儘さから随分と羽根を伸ばして結構愉快地に生きている私なのではあります、どこか心密かに自分の帰属すべき群れの人々を愛せない自分をとても悲しく辛いもの感じていたように思われます。実は、いつぞや或る席で（或る精神

分析のサークルにめずらしくも呼ばれてお話することがあったわけですが)、集団での活動について私がどう思っているのかを、フローのどなたからかに尋ねられましたの(どうも明らかに不審がられているらしいのでしたのね)。まさか「野暮で退屈なのは死ぬほど厭だから」とも申せませんし、それで「群れることへの私の羞恥心」ということでお答えして辛うじて逃げたのですが、その際、更に私、こう申しましたのね。「…しかしながら最近色々なところに出て行く機会があり、志(問題意識)を同じくする者同士が連帯すること(共同戦線を張ること)の必要性を強く意識するようになった。しかしそれにしても、個人が個人に<ワタシはアナタを支持します!>という呼び掛けで結ばれることを、私は大事にしたい」と。まあ、こうした頑固さがいかにも私らしいのです。こんなの、皆さんにはちっとも受けないことは重々承知の上なので。ちよっぴり意地悪でもあるんでしょう。ところがそれを今頃皆さん方は記憶してなぞおられませんように、自分の言葉に自分が縛られることってありますわね。そう言った手前、こっちの独り善がりでも、私はそう決めたんだからやらなきゃって、(ちよっぴり悲愴な気分も混じって)自分一人窮屈に思い込んでいたようなわけです。

実は此の度先生におたより申し上げましたことも、今更何も知りませんでしたって顔出すなんて、何て恰好悪いことかと、きまり悪い思いで、とても躊躇しましたの。それに私のような者が先生に対して「私は貴方を支持します!」という想いをお伝えしていいものやらどうだろうかと…。ですからこういう場合は(まあ言わばファンレターの類いなわけですから)、お返事は‘梨の礫’か、せいぜいあっても紋切り型の礼状ぐらいという風にしか当然期待しませんわけで、

それがとんでもなく予想外の嬉しい“応答”をいただきました、どんなにびっくりしましたことか。こちらが仕掛けて応答を‘無理強い’したかのような面映ゆさもちよっぴりございましたけれども(貴重なお時間を随分といただいたことになりませぬのね)、でも何よりも素直に喜びたいと存じます。

さて前置きが長くなりましたけれども、ポメリウムのCDをお贈りいただきましたこと、このような先生からのお心遣い、どんなに嬉しゅうございましたことか。実は私もここしばらくずっと『ヒルデガルト・フォン・ビンゲン』に浸っておりましたものですから、あらあら先生も…! ?って、一瞬まるで旧知の懐かしい友にでも会ったようなそんな嬉しさがございました。自分が日頃心密かに大事に思うものを誰彼に打ち明けることには概して人は躊躇するものでございますわね。億劫がって止めておこうと得てしてなりがちですよ。先生が“妙な癖”とご自分の勇気を奥床しく控え目におっしゃっておいでなのがよく解る気が致します。無感動に出くわすことで人は傷つかずにはいられませんものね。でも私が先程申し上げました‘共同戦線(連帯)’の謂とは、まさにこの感動に列なる者たちの連帯という意味なのです。その意味では誰もが“種撒く人”であり得ましよう。私も敢えて私の頑迷な羞恥心に堪えて、自分の命を支えてくれている喜びを誰彼にこれからも出来るだけ語ってゆこうと思っております。「あなたもどうぞ…」の無垢なる祈りを、そうした呼び掛けを、交歓し合うことの喜びにまさるものはありません。嬉しゅうございます。お陰さまでここしばらくギョーム・デュファイの音楽に聞き惚れております。それでとても面白かったのですよ。いつしか自分の身体が浮遊してゆくような、それはまるで誰かの背中におんぶされているというか、誰かの腕の中に抱かれて憩うような夢心地に陶酔

してゆくのでしたの。そこで久し振りに「新美南吉詩集」の中のお好きな詩篇「天国」が思い出されましたのね。先生のお母様が昨年お亡くなりになりましたとのこと、謹んでお悔やみ申し上げ、この詩篇がもしかしたら先生のお慰めになりませんかしらとそう願いつつ、ここにお届け致しました。

それからお返しに私から先生へ「ヒルデガルト・フォン・ビンゲン」を差し上げたいと思われましたの。お持ちでしたかしら？ 他にも何枚かのセクエンツァのCDがございますが、今回はこれを選びましたのね。なかなか面白い比較が出来そうですよ。或ることにふと感じ入りましたの。セクエンツァの女声アンサンブルの声にずうっと耳慣れていた私の耳には、ポメリウムの男女混声が格別に新鮮に響きましたの。殊に男の肉声が放射する優しさ柔らかさに、痛く胸打つものがございました。時折それはまるでバレエで言えばパド・ドゥみたい、男声が女声をサポートするかの如くに絡み合いそして包み込みながらゆったりと押し上げてゆく。そしてだからかしら、何故か女声が潤っているって…。私がお届け致しましたCDをどうぞお聴きになっていただきますように。その声にはいかにも無限大の虚空へと飛翔するような切迫した清冽な透明感がございますでしょ。どちらのCDにも勿論、神への賛美そして愛を詠っているのではありますが、セクエンツァの方がより天上的であり、ポメリウムの方はこの世に（地上に）繋ぎ止められているような、つまり天と地とのバランス・均衡がそして絆がより堅くあると言えませんかしら。これはどういう違いなのかしらって、考え込んでおりましたの。おそらくヒルデガルト・フォン・ビンゲンとギョーム・デュファイの違い、その生きた世紀の違いでもあり、女であるということと男であるということの違い（それは同じ聖職

者であっても）…。そしてそれを特に我身のことに照らし合わせ、ふとこう思いましたの。女のことであることの厳しさ・辛さというものを…。そしておそらくは男を傍らに肌身に感じ取ることで、それはやわらくということなのかしらと…。不謹慎に聞こえなければよろしいのですが…。己の中の欠落したものを見据えてゆくことが大事ですものね。それが寛容になれるということでしょうか…。いずれにしましても、これは単なる偶然というのでもなく、先生と私が選んでいるものそれぞれが、おそらく双方の違いを奇しくも露呈しているのだらうという気がしまして、なかなか興味深いものがございました。

芸術と癒しの繋がりについての先生の深い感慨にはまったく共鳴を覚えます。‘美の呪縛’というものを想うのです。それは自らを死の淵(闇)へと駆り立てる力を断固斥ける力(光)としてあるものだということを……。敢えてここで‘呪縛’と申しますのは、それはおそらく慰め以上の何か或る種の倫理的責任を促さずにはいない、そんな怖さを感じるからなのです。つい最近私は、このお正月休暇のできごとなのですが、ダイヌ・リパッティの奏でるショパンのピアノ協奏曲第1番を、本当に25年ぶりに聴いたのでしたの。ああこの‘旋律’これこそがこの長い歲月私を抱え離さなかったものだと思います。ルーマニア生まれのわずか33才で夭折した不世出のピアニスト、ダイヌ・リパッティ、それはまさに私の‘青春’でしたの。暗い闇の中の一筋の光……。私がかねてから、自分がどうしてこういう自分なのかと訝しい思いをすることがありましたのね。内気で臆病なわりには時として変に大胆なところがあったり…。この一途な果敢さ、そして‘我が侷さ’は一体何なのかと…。それが何故かを判った気がしたのです。この‘旋律’、

それはまるで‘神に召された’かのように、私を呪縛していたということなのだろうと……。そして私は、それを‘神の恩寵’として常にどこか意識の隅で判っていたのだろうと思われるのです。そこに慰めと癒しとがある、と……。

さてさて、音楽の素養のまるでない私にしてみれば、先生がご自分の日々の息遣いを託される伴侶としての楽器をご愛蔵なされておいでだと伺いまして、先生のチェロを弾かれるお姿を想像しながら、あらまあ何て恰好いい！と実に羨ましい限りです。先生もお幸せなら、そのチェロもまた幸せなこと……。

昨年かつてのN響のチェロ奏者でいられた徳永兼一郎という方が亡くなられて、ホスピスで最期のコンサートを催された模様がテレビで放映されました。ご覧でしたか？ その彼が確か56歳でしたか、ようやくチェロの音が判りかけてきて(!)これからという時に死なねばならない無念さを吐露されておいででした。そして何よりも痛恨の思いは、5、6年ほど前に或る著名な弦楽器製造者(日本人!)に特別注文されたんだそうですが、そのチェロがようやく完成し手元に届けられた。それに今からまさに息を吹き込んでゆかなくてはならないのに、それだけの時間が許されてないということ。KTのインシャルの刻まれた、そのまっさらの輝かんばかりのチェロは今や弾き手を喪い、命の芽生えを突然摘み取られた侘しさの中にポツンと所在なげに佇んでおりましたのよ。これって、とても暗示的ですよ。『☆☆病院』閉鎖という先生のお辛かった経験とも関連づけますならば、いっそうに……。

人の寿命には限りがあり、形あるものはすべて虚しく消滅することの哀惜がひたひたと身を浸します。そして、だからこそ生きていられ

る限りにおいて、出逢うお互い同士が息を吹き込む(命あるものとする)ことに手間暇を惜しんではならないと、肝に銘じるわけなのですね。

まあそれでも尚、私は Viva la Vie ! (人生に乾杯!)をやってますのよ。ある時ひょんなことで「マーサ・グレアム」を知って以来、自分がこれまでの人生において取りこぼしていた joie de vivre を取り戻すのに躍起、つまりはバレエに夢中ですよ。

文芸評論家の三浦雅士氏をご存じでしょ。もう、あの方、憎らしいんですの。1980年代、コンテンポラリー・ダンスの全盛期、その真っ只中のニューヨークにいたんだそう。その面白さに取り憑かれて帰国後、「ダンス・マガジン」の編集にまで首をつっこむようになったとか。つい最近までその著書「現代のバレエ」を読むまで知りませんでした。とつても妬ましい。しまったあ！です。私もロンドンにいた1975年頃、バレエ業界に変革(クラシックからモダンへの変遷)が起こりつつあるというのは薄々承知はしていたのですが、オペラ気遣いの友達がいましたので、オペラの観劇はお付き合い程度はしておりましたが、バレエの方はさっぱりでしたの。勿体ないことをしました。その当時からもどこか臆ろげながらに振付(コレオグラフィー)というものには精神分析との関連で特別な興味を覚えていたのですが、ずうっと忘れていたのでしたの。これは何という面白い世界なのでしょう。21世紀の精神分析とは(もしも生き延びることができるはずれば……ですが)、「身体性の復権」を軸に展開するという風に私は考えておりましたので、ここで改めてバレエとの出会いは私にとって格別な意味を持つこととなります。とにかかにも今はまだ、ワアーすごい！ワアーきれい！の段階でしかありませんのね。私などと違って音楽に造詣の深い

先生でしたら、現代という此の時代で最も優れた才能が結集されている芸術部門と見られます。コンテンポラリー・ダンスにより深い理解と愉悅を見いだされるでしょうと思われます。武満徹の作品などにもバレエの振付が試みられているというのがとても愉快じゃありませんか。

それで最近ちょっと面白いビデオを入手しましたので先生のお耳に入れておきましょう。「希望への苦闘」という題で、パッハの無伴奏チェロ組曲第5番をヨーヨー・マが弾き、それに坂東玉三郎が振付し、踊るといった趣向のもので。それはそれはゴージャスなパフォーマンスといった仕上がりです。蠟燭の灯がかざす光溢れる夢幻的な舞台上で玉三郎が裾の広く引きずったイブニング・ドレス風の着物を着て、ヒラヒラと蝶のごとく踊っている。感覚的な美の世界は充分でしたが、芸術作品としてはどうももう一つ何か不足でした。ヨーヨー・マのチェロの音に緊張(葛藤)があるように思えて今一つ不満だったというだけではなく、玉三郎の振付にはただ音楽に振り付けられたという程度で、‘内面的な語り’がそこに窺われるまでには至っていないこと。更には歌舞伎そして女形の限界と言いますか、俗臭が微かに仄めいていたということなのです。三浦雅士氏などは当代随一の踊り手として玉三郎を絶賛していますが、振付師としては未熟です。それはヨーヨー・マが「……時には天国に向かって演じるように……ぼくも自分を超越した部分で演奏したいと思うんです。つまり感情に身を任せるのではなく、人間的な部分から離れて……」と語るのを、玉三郎が遮って、「あまり考えない方がいいんじゃないか……考えすぎるのはよくないと思う……」と応答するんですのね。こころ辺りの話になると、いつも私はガックリとくるんですのね。内面的世界を言語で彫琢すること

の軽視・怠惰。それがいかにも‘日本的’なのだ勘違いしての居直りの危険性。異文化の交流において、これは敗退です。武満徹が自分の音楽を視覚的に形象化するという行為から始めるというのが(私にはさっぱり不可解な事柄ですが)とても気に入ってますの。そこには、「言語」という媒体を有する限り、彼の音楽性が映像化、そしてまたバレエという舞台芸術へにも展開し得る土壌を孕んでいると言えましょうから……。まあまあ、時折こんな風に私は直感的独断で、いかにも権威ある人のような物言いをするんですよ。可笑しくなりますの。まあそうしたわけでこのビデオをお送りすることは致しませんが、唯ふいと先生がチェロを演奏なさっておいでの時、どこか頭のイメージだけでも身体的な踊りの感覚をも楽しめたらいかがかしらって思いましたものですから……。

さて長々と綴りました。まだまだありそうですがここで止めておきましょうかしら。最後に、先生はジョルジョ・ルオーのどの作品をお持ちでしたの？いつかまたお聞かせくださいますかしら。エッ、オツという感じで、絵画のことになりますと、私とっても気にせずにはいられませんの。チェロを弾く先生には、パイプオルガンを奏でられた森有正氏に負けないぐらいに、ジョルジョ・ルオーはすてきに似合っておいでなんでしょう。確か『出光美術館』にかなりの数のルオーの蒐集品がございましたわね。「ルオー展」が開催されるのをあまり聞きませんねえ。いつか機会があれば、是非ご一緒させていただけますかしら。それから‘箱庭’みたいな私のオフィスではございますが、いずれお暇な折りに気晴らしにお訪ねいただきたいと存じます。先生の開業なされておいでの\*\*にはこれ迄時折出向いたこともございますし、私の方からそちらにお訪ねする

ことも勿論出来ますけれども…。これをご縁に何かとお教えいただければ、どんなにか励みとなりますでしょう。どうぞよろしくお願い申し上げます。ご機嫌よろしく。 山上 千鶴子



1997年4月18日

### Dr. A.S.先生

ようやくにかぐわしい風薫る季節を迎えております。街路樹のイチヨウ並木は、ついこの前までは薄寒い灰色の空に裸んぼの黒々とした枝々をレース編みのように拵げて、凍える冷気に耐えるかのようにじっと佇んでおりましたのに、今や競うようにてんでに薄みどりの衣装を身に纏い、夜などになりますと街灯に照らされ、まるでその若葉の艶めきはイルミネーションの輝きのようにすら見えるのです。「春よ、お帰りなさい、また戻ってきたのね」と、樹木たちの冬の眠りからの“お目覚め”には、そんな挨拶で迎えたい気分がいたしますわね。

さて、此の度も又々さまざまに興味尽きないお話しをお届けいただきましたこと、大変に嬉しゅうございました。時には切なくも胸を衝かれるような、時には(確かにおっしゃる通り、互いの《共通感覚》に)驚き呆れながら、あらまあ、あらまあと心のうちで呟きながら拝読致しましたの。

まずはこの“稀有なるもの”、先生から此の度お贈りいただきましたCDについて語らせてください。これこそ妙なる調べというものですね。完全にこの“痺れ”に、私、酔っておりますの。明るい日差しに照らされた部屋いっぱい晴れ

やかに鳴り響く音の波に浸されながら、この調べが似合う“舞台(装置)”とは果してどんなものかと頭の中で忙しく眼で追い求めておりましたら、不意にイサドラ・ダンカンよろしくギリシャのパルテノン神殿の廃墟の中に一人佇み、裸身に薄絹布一枚を纏い、その裾を風になびかせ、緩やかに漂い、まろやかな線を幾重にも描きながら踊り舞っている自分が想像されましたのよ。アルカイックな微笑を浮かべながら、微睡みの時の中で、それはまるでギリシャの悠久なる天空にひしと我身が抱かれているような……。ところが夜も更けて、スタンドガラスのランプ越しの薄灯の中で心鎮めて聞きましたら、その哀切な響きが私の中に寂寥を呼び覚ましたのか、また全然違った映像が浮かびましたの。北極沿岸のどこか、フィヨルドの景観をはるかに見下ろす崖の上に、闇にすっぽりと包まれて、ただ車のライトにその身を浮き彫りにさせて、男が一人サクスを奏でているといった荒涼たる風景…。それではちよびり寂しすぎるとしたら、おそらく彼がふと見上げた空には、星が瞬き、オーロラに彩られた雲が妖しくも揺れうごめいているのが見えたかも知れない……。そのどちらの‘私’も私はとても好きで、気に入りましたの。この途方もないナルシズム！ どうぞお笑くださいませ。

ともかくにも、このCDは或る修道院で収録されたものということですが、屋内はまるで似合いませんわね。おそらく天井などは邪魔でしかなく、ぶち抜いてしまわなくては…。何も無いのがいい。つまりは此の世的な絆から解き放たれて、己が卑しき身を神の御前に投げ出す、そんな時のためにのみある音楽でしょうか…。きっと。

先生からのこのCD、或る他の理由でも嬉しい贈り物でしたの。実は、私の男性

患者の一人でテナー・サクスを演奏される方が  
いまして、私はジャズにはまるで疎くて分からず、  
一度その生の音色を聴いてみたいものと思って  
おりましたのね。お陰さまで念願が適いました。  
その方の親という人が(父親も母親も)我が子を  
“潰すために愛する”といった典型的なタイプで  
して、危うく潰されかけていたところで、彼は大学  
進学を契機に、辛うじて逃げるには逃げたので  
す。しかし今も尚お気の毒にかつて親が彼に仕  
掛けた“罨”そっくりそのままをそこかしこに(或は  
誰彼にも)見してしまうものですから、人づきあい  
においてかなりの難儀を抱えているわけなのです。  
でもフリーターの仕事をしながらも、夜な夜な読  
書に励み(「自分にとって大事なものを忘れない  
ように」って、そうおっしゃるの！ 精神分析関連  
でも私などよりはるかによく勉強しておいでです  
のよ！)、その後で愉しみとしてサキソホンを吹く  
のを日課としておいでなのだそうです。かつて六  
十年代のアメリカで反戦運動と連動するかたち  
で起きたジャズブーム、サクスの暴力的な響き  
に魅了されたとおっしゃっておいでです、今のと  
ころはまるっきり独学で、教則本に沿って毎晩  
練習を繰り返しているだけらしいのです。当然  
“即興”をめざしておいでなのですが、甚だ心も  
なく、時折心挫かれかねない印象のようでござ  
います。職業別電話帳に載せました私どもの広  
告をご覧になられてお越しでしたのですが、滅  
多にはない出逢いと私は嬉しく感じておりますの  
。そうした世間的には見過ごしにされやすい名も  
無き普通の人たちの声なき呻きを、精神分析  
家を名乗りながらも自分自身どれだけ聞き取る  
ことができるかと時折恥ずかしく身の縮む思いが  
いたします。それでも毎回の分析セッションは言  
わば‘即興’なわけですから、彼の埋もれた声な  
き声が、時にはたどたどしく、時には案外力強く  
聞かれたりもして、私としましてはひたすら良き

‘伴奏者’でありたいと願うのみなのです。ヤン・  
ガルバレクのサキソホンは、そんな彼＝自分で  
はないもの(→分かり得ないもの)が自分でもあ  
るもの(→分かり得たもの)になるための、私にと  
っては一つの重大な契機としてあったと言ってよ  
ろしいでしょう。有り難くお礼申し上げます。

さてさて先生からのお手紙に戻りまし  
ょう。幾つかぜひお話ししたいと思われた事柄が  
ございます。どれからにしたものか迷いますので  
すが、まずは“高田博厚氏”に先生が私淑なされ  
たというお話しについて。そのお名前を文面の中  
に見た一瞬、眼を睜りました。実は先生のお手  
紙に“ルオー”が触れられてありましたとき、どち  
らかと言えば確かに私の関心からして(例えばルド  
ンなどと比較しても)あまり陽の当たらない日蔭  
の場所にあったようでして、あらまあホントにと慌  
てまして、早速「渋谷区中央図書館」でルオー  
の図録を改めて手に取りましたの。その際あれこ  
れ関連参考図書をと探したら、高田博厚  
／森有正共著『ルオー』が眼に止まりましたの。  
どんなに嬉しかったか。このような本こそ、まさに  
抱き締めたい！と言うに憚らない、そんな気持  
ちがして、この一冊と出会っただけでも十分に幸  
運だったと内心密かに先生には感謝しておりま  
したものですから、月並みに言えば、ああやっぱ  
りそうなんだということになりましようから、驚いたと  
も言えませんが、驚きました！

しかしこの小さな本、前半のルオー  
についての概説しか私は読んでおりませんのね。  
後半の高田博厚と森有正とが互いに交換した  
書簡は敢えて読まずにおりますの。その理由は、  
或る種の畏敬を覚えたと言いますか、読まずし  
て、そこにとても常人の降りてはゆけない“魔の  
湖”を見たと言いますか、彼らの中に何か凍りつ  
いた涙と言いますか、傷痕の癒えない疼きを感

じたと申しますか、それはキリスト教ヨーロッパの圧倒的な力の前に日本人であることのちっぽけさ(矮小感)に打ちひしがれざるを得ない、そうした懊悩の軌跡を、この二人の高潔なる紳士たちの魂の中に見たような気がしたからなのです。そしてそれは私も、でも私は……と、どうにも言葉にならないままに、尚私の中にも一つの“応答”をいずれ見付けてゆかなくてはならないとの自覚を促されます。この猥雑かつ猥褻なる日本社会にあって、日本人であることと精神分析家であることの間微妙に介在する“気まずさ”。それを内に抱えつつ自分が生き残れる道を模索しております。単なる“剽窃”などには甘んじたくはない。しかし時折自分が途方もない迷路に陥っている気が致しますの。

可笑しいことがありましたのよ。或る若い哲学者と親しく知り合う機会がありまして、彼に尋ねられましたの。精神分析関連図書を読みたいが、幾つか誰かの著作を推薦してくれないかと。それが驚くなかれ、唯一冊も私の頭に浮かんできませんでしたの。それで苦し紛れに、何と彼に返答したかといいますとね、呆れたことに、西田幾多郎の直弟子の西谷啓治が著しておいで「正法眼蔵講義」に言及し、そこにこそ最も精神分析の真髄がありますよと伝えたんですの。いつもこんな調子で、私の頭の中は‘東奔西走’(つまり文化的な意味で)しておりますわけ。「アウグスティヌスを読む」という公開講座が新宿の朝日カルチャーセンターでございましてね、『告白録』に引き続き、今期は『三位一体論』について加藤信朗先生から講義を受けております。でもでも、なんですよ。あーあ、いつ判ったことになりますやら……。それにしても、人となりどころか稚気が抜けず、知識面でもおそろしく雑駁な私などにはどだい無理と

は承知していても、先生がかつて若かりし頃に高田博厚氏に私淑したと伺えば、一瞬烈しい羨望を抱かずにはられません。ああ私も、でも私は……と、またまた溜息になってしまいます。

こんな風に気が滅入ります折りには、私は自分の中に“アリアドネの糸”を手繰り寄せんとするのです。ギリシャ神話に登場する女性の中でもとりわけ“アリアドネ”は、私が私自身をそれに重ね合わせることに悦びを感じるという意味で、痛く魅了されてなりませんの。テセウスという英雄が迷宮ラビントスの怪物ミノタウロスを退治するお話し。それをアリアドネが助けんとするわけですが。言うなれば、「行きはヨイヨイ、帰りはコワイ」というところでしょうか。アリアドネが彼に手渡した糸玉を手繰りながら、テセウスは迷宮を無事脱け出られたという結末が妙に象徴的と思われませんか？ 何の？ と訊かれると、困ってしまうのですけれどもね。敢えて精神分析のとても言っておきましょうかしら。

……今回ルオーの図録からカラーコピー機で複写したものを同封致しましたが、この『屈める女』の絵は私にとって一つの‘アリアドネの糸’でもあったことをぜひ先生にもお伝えしたかったからですの。(もう一枚の『黄昏』も……) ついでに申し上げますと、これは今回頂戴しましたCDの7番目の曲“この上なく美しいばら”が至極似合っておりますような……。このような裸婦像を、他にも誰かの作品を、どこかでご覧になられたことがお有りでしたか？ 有りそうで、有りそうにない、そうじゃありませんかしら？

前回先生におたより差し上げましてほんのしばらく後でしたが、銀座の《ギャラリーたけなご》で『ルオー展』が催されましたの。お見逃しで

したかしら？ 私は最終日に何とか間に合って、ラッキーでした。堪能しましたのよ。とりわけて『孤独のキリスト』という俯き加減のキリストの苦悩する横顔を描いた油絵がその重厚さにおいて抜群に印象深いものがありました。でもでも、やっぱり私の心は、この図録で見た『屈める女』にどうしても傾斜しがちなのですよ。どうも臆病で怖がりな私めは、どうも深淵なる闇というものを極力忌避せんとする衝動がありますようでして、こちらが精神分析家として底の浅さを想うわけですが、そんな自戒にさらに鞭打つようにして、詩人パウル・ツェランとの出会いが最近ございまして、もう本当に愕然として項垂(うなだ)れておりました。

ここにパウル・ツェランの詩を2篇お届け致します。このユダヤ系のドイツの詩人を先生はご存じでしたかしら？ ナチスの苛酷な迫害の嵐の中で非人間的な極限状況を生き延びながらも、その後徐々にパラノイアの病魔に侵され、1970年にセーヌ河に投身自殺して果てたということですね。彼という‘衝撃’は、私にとって一つの事件でした。その衝撃をまともに受け止めるだけの“悲の器”を持たない己を恥じ、かつドイツ語にはまるで疎い自分を呪いといった具合で、頻りに苛立っておりますわけで……。かくなる私が不遜にも不適切な(!)と翻訳者に怒りをぶつけるのも手前勝手なわけですが、恐ろしく意味不明でかつ往々にしておそらくは‘的外れ’であり得るだろうと猜疑心ばかりが募ってゆき、私の苛立ちは絶望的なのです。それで仕方なくいつもの調子で、それらの翻訳された日本語の字面に焦点づけることを敢えて拒否して、焦点をずらして字面の奥へと忍び入り、直観的に彼の‘痛み’に触れよう、その‘嘆き’を聴き取ろうとしましたわけで、それらが他人に披

瀝する価値のあるものではないのは承知しておりますわけで……。それでも敢えて先生にお話し致しますのは、今回お送りいただきましたCD『オフィチウム』への返礼のつもりとお考えくださいませ。「彼らのなかには土があった」という彼の詩は、モラーリスの『わたしを見逃してください、主よ』(『ヨブ記』7:16-21)と美事に呼応した響きがございますでしょ？！ 胸が心底震えます。ユダヤ人にとって、ユダヤ人であろうとすることは地獄であり、又ユダヤ人でなくなろうとすることもまた地獄なのですねえ。この種の“懊惱(痛み)”は明らかに我々日本人の想像を遙かに越えております。そして我々が彼らを妬み羨むのもおかしいとは申せ、でも実はまさにそうなのかも知れないと考え込んでしまうのです。アイデンティの堅固さとは、その中核においてこの苦悩する(痛み)の能力こそが問われるとしたら、その脆弱さにおいて、アイデンティの喪失はいとも簡単でしかないでしょうから、我々日本民族の行く末は危うく脆いのではと憂いざるを得ません。

さてしかし、聖書のヨブ記とこの20世紀のユダヤ民族が輩出した‘恐るべき子ども’でありますパウル・ツェランを重ね合わせますと、微妙な違いが見てとれます。それは唯一神エホバとの“生命の契約”に結ばれてあるという信仰を巡ってということになりましょうか。ヨブ記がそうであるように、神の“配慮(御計らい)”をどう受け止めるか、そこに信仰が試されるわけで、どのように抗い逆らうにしても、最後には人は“悔い改め”そして赦される、それこそが信仰上の眼目なのです。皮肉にもナチスの暴挙をあそこまで許した背景に、「神の名を崇めるためにアウシュビッツで殺された」といった奇妙な論理が罷り通るようなユダヤ人の宗教的事情がありそうです。生命の契約において「いのちの国」で復活する、そう

した信仰を断念し放棄することがいかに至難なことか。宗教を唾棄すべき“麻薬”と見做したフロイト、しかし存在し働きかけて止まない「在りて在る者＝神」と結ばれてこそ永遠の命に与(あず)かるといった信仰を人々に諦めさせるのはあまりにも酷薄に感じられてならないのです。ではどこに拠り所があるというのか。詩人ツェランは、フロイトとは違った趣きにおいて、結局のところユダヤ民族の生き残りの道を模索する時代の子であり、それ故に死を賭しての壮絶な闘いを生きたと、私は想うのです。だからこそ私の中で妙にひっかかるのは彼が最終的に辿るに至った、この「彼らのなかには土があった」という詩のなかでも出てくる「誰でもないもの(Niemand)」というものの実態です。それは、森治という方の解説にもありましたが(「ツェラーン」人と思想・清水書院)、「全き他者」とか「大文字の無」としても語られております。そこに、懐かしくも再び出会った、そんな気がふとしましたら、同じくこの書物の中で、ツェランが、自己放下とか離脱、内的貧を説くエックハルトと極めて深く響きあうことが指摘され、更には道元の「正法眼蔵」の「現成公案」からの引用もございました。それらこそまさに西田幾多郎そしてその流れを汲むものたちのこだわりでもあるわけです。どうしたことなのですかしら？ 彼らの‘人格神’が我々の“無”へと収斂されてゆく。東西の文化交流が逆行していますの？これが時代の運命というものなのでしょうか。まるで人間の“精神”とか“人格”は異常な速さで核分裂を起こしているような……。『我と汝』の関係性のみではもはや歯が立たない、どのような“尺度”ですらもはや測りようのない錯綜し混迷の極みにある諸々の現実が眼前にあるということでしょう。不思議な気がしてなりません。門外漢の私が言うのはおこがましいのですが、先生のおっしゃる武満徹の“普

遍性”ともここらは関連してきませんかしら。あの方の音楽が私に分かったとも言えませんが、直観的に理解したのは、‘中心’がどこにも無い、そして同時に“中心”が至るところに偏在しているということでした。聴く者の耳にそれら点在する点を統べ纏めるだけの精神性・人格性を強いるということ。これは何という逆説。これ迄のクラシックに漫然と耳慣れた者には雑然としか映らないだろうということですね。演奏家にとってすら極めて“記憶困難な”代物なのではないか。しかしこの“記憶できない”ということが“予測できない”ことであり、従って演奏のその都度に新鮮な驚きと発見があると言えますかしら？つまり退屈とは無縁だということかしら。

或る可笑しなことをふと思い出しましたの。マーサ・グレアムがね、インタビューで「舞台の中心はどこですかと訊かれたので、私が居るところ、それが中心よと答えたのよ」とやや得意げに語ってらしたのですが。彼女の振付・演出、そして主演でもある「Night Journey」と「Appalachian Spring」の作品をビデオで見ましたけれども、確かに彼女の言った通りで、まさにそうであったからこそ退屈を免れませんでしたの。時代感覚がもはや古いということ。2回続けて見たいという気がしない。こちらの緊張感を(想像力)を刺激しないわけですよ。1回見たら分かっちゃったというのは、武満徹の音楽のように何度聴いても分からないというのとは雲泥の違い。何が‘時代遅れ’であり、何が‘時代の要請’かを正しく見抜く力が欲しいです。それも‘時代の流行’を察するに素早く、それらしき代物で逸速く人々の関心の需要に応えるというのともわけが違うでしょう。

そういう意味で先日 NHK ホールで催されましたジョン・ノイマイヤー率いるハンブルグ・バ

レ工団の『オデッセイア』は痛く失望しました。能の手法を取り入れているという、確かに腐心の跡はあちこちにありましたが、オデッセイアの物語とベトナム戦争とを二重映しにしたという欲張った演出は饒舌かつ繁雑すぎて、能の舞台とはほど遠く、成功しているとは言い難いものでしたの。むしろその前に見た「キリアンの夕べ」と題されたネザールランド・ダンス・シアターが秀逸でしたが、それは改めて別の機会にお話し致します。そろそろおしゃべりを終わりにしなくては。。

それからツェランの詩『旅の伴侶』は先生のお母様の思い出に捧げたいと思ひまして。実は本当はそれではなく、或るCDを差し上げたいと、でも高尚なものではなくほんのお慰み程度のものでして、ためらっておりましたのね。でも手に入るかどうか探してみますね。入手次第、いずれ又いろいろこの続きのおしゃべりを添えてお届け致します。実は今厄介な原稿をひとつ抱えておりますので、ちょっと先のことになるかも知れませんが。それでは、どうぞご機嫌よう。

山上 千鶴子



1997年10月1日

Dr. A.S.先生

&奥様

先日は、遥かなるギリシャの地から御二人の美味なる旅の喜びのおすそわけをお届けいただきまして、とても嬉しくお礼申し上げます。

さて日本はそろそろ秋の気配に淡く包まれて、あまりにも彼地とは相違するこの湿润なる空気に、いつしか夏の興奮も夢幻のよう

に思われますかしら。でも記憶の余韻に浸されて、いつかまた戻ってゆける、そんな嬉しい予感と期待の中に今しばし、お二人が心地よく憩っておいでなのを想像させられますような……。

ちょうど今頃、路上を歩いておられますと、どこからともなく金木犀のかぐわしい薫りが漂ってまいりまして、秋の先触れを告げられたような気がいたしますのね。つい先日、たそがれ時に代々木公園を散策しておりましたら、薄暗闇の樹木の合間に立ちこもるそれらの薫りにまるで此の身が包まれて、まるで浄めの儀式にあずかっているかのような至福の一瞬を味わいました。折々に日常の自分の位置からずらした地点で遊び戯れる余裕こそが必要のようですわね。

ところで、岩波ホールで上映中の「ある老女の物語」という映画を御二人にぜひお薦めしたいと思ひましたの。新聞紙上でも取り上げられてますから、もう既にご承知とは思われましてけれども……。時折に私自身が自分の中に‘生命の薄さ’を覚えることがございます。己の脆さを感じて一瞬怯むとき、自分の前を歩んでいる誰かに引っ張ってもらうことが、決して甘えではなく、必要だっと思われるとき、ああこういう人が傍らにいてくれたらと心底願う、そんなお年寄りがこの映画の主人公なのです。それに老いの視点から我身を振り向けば、如何にも窮屈にそして頑なに生きてる自分なのかと反省させられたりもいたしますのね。そして生きることが誰にとっても一回限りの‘芸術作品’なのかしらとも思われて、それじゃあ大いに美事なるものと、いっそう発奮させられます。

それではいずれ又、ご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1997年11月23日

Prof. 吉野 要先生

ようやくに秋の訪れを迎えて喜んでおりましたら急激に寒さが募り、路上の落ち葉もカサカサと風に吹かれて舞い上がり、いよいよ年の暮れの寂しさを味わう季節ですわね。お元気でいらっしゃいますか？

先日はわざわざお忙しい中を『三河児童事例研究会』に御足労いただきまして有り難うございました。「貴女の講演を聴きにきた・・・」とおっしゃって、お懐かしい顔がひよいと目の前に現れたのでした。思いがけず、とても嬉しい驚きでした。日頃ご無沙汰しておりますので、ご挨拶の言葉もないほどで、本当に恐縮致しました。吉野先生に私の拙い話しをお聴きいただけましたことだけでも感激ですので、「苦労したことが分かった・・・」と最後におっしゃっていただき、何か一瞬タイム・スリップして「愛知県立女子大学」当時に戻ったかのようで、胸がキュンと鳴りました。普段いつも私は自分一人で誠に我がまま勝手に生きてるものですから、誰かに褒められるということはまるで期待しませんのですけれども、素直に嬉しいと感じられて、それはやはりそれが吉野先生だったからでしょう。私もこれで随分いい歳になりましたけれども、誰かに対して自分をまだまだ‘小さき者’として感じられるっていいですわね。これからもおそらく先生に対して、私はそうであり続けるだろうと思われますの。これからもどうぞよろしく。

私もようやくここ最近になってどうにか自分なりに精神分析的手法がほぼ固まってきたからでしょう、そろそろ自分を聴いてもらっていいかなという心境になっております。いつかお会いできたらと思います。ご上京の折りにはご連絡くださいますように。ご一緒にお茶でもいかがでしょうかしら？差し当たって何もお礼するものがございませんので、10年程昔に雑誌『教育ノート』に掲載された取材記事のコピー、それに私が開業しておりますクリニックの新しいご案内資料などあれこれを同封させていただきます。お暇の折りにご覧いただければ幸いに存じます。

それでは、どうぞご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1998年7月7日

林 正巳先生

ご機嫌いかがでいらっしゃいますか。いつぞや、昨年の秋頃でしたか、原宿の表参道通りの『ギャラリー華音留』で催されました先生の個展で、油彩の御作【想い】を頂戴いたしました者です。ご記憶にございますかしら？

あの節は、画廊主を通しての筆談ではありましたけれど、とても印象に残る、そして心嬉しい会話をさせていただきました。画廊のホールでお祝いに駆けつけた聴覚障害のお仲間の皆様方が嬉々として手話で会話を楽しんでらっしゃるのを目の隅で眺めやりながら、

手話には疎い私はとても羨ましいような、また不調法を恥じ入る思いをも致しましたけれど。その際に、先生が私のために言葉を書き綴ってください、お手渡しくださったメモ用紙を、私は今でも捨てきれずに大事に持っております。『心で聴く』とおっしゃった、お言葉が深く心に沁みましたのね。

あの折りに申し上げましたように、私は精神分析を専門とする心理臨床家として、イギリスでのトレーニングを終えて帰国しました1980年以降、原宿で個人開業をしておりますが、常日頃分析患者の方々の心の内なる‘声にならない声’に耳を傾けることを生業としております。先生の【想い】はそうした私の傍らにいて、どんなにか慰めと励ましをくださっておりますことか。真摯であれと、そして辛抱強くあれと……。あの絵では、ピエロ風の人物が両耳に手を当て、なにやら遠くから微かに聴こえる鼻の鳴き声に想いを巡らせていましたわね。それは、何ごとか、確かなる‘訪れ’を待つかのような、張り詰めたひたむきさがあり、とても感じ入りました。「聴く」ということ、下手に聴こえるがために、聴いてるつもりで実は聴こうとしていない我々‘健常者’などには思いも寄らないほどに、耳がご不自由な難聴者の方々にとって「聴く」ということはまさに濃密な‘心の営み’としてあるんだなって、改めて知りましたような次第です。

ずうっと独り身で仕事一筋できたものですから、どこかしら、いつになっても‘我がまま娘’の風が抜け切らない私なのですけれども、もし一つだけ自分に誇れるものがあるとしたら、

それは折々にとても不思議に感じるのですが、「本当に欲しいものを、本当に欲しいときに見つけられる」という才能がどうも自分にはあるらしいということなのです。先生の御作【想い】を頂戴しました、あの折りも確かそうだったのです。『ギャラリー華音留』は、なぜかそれ迄まるでご縁がありませんでしたのに、通りすがりに、ふいと気まぐれ的にちょっと覗いてみる気になったのですから。こんな風に心が真に喜ぶことに出逢えるとき、‘神の恩寵’というものを心密かに覚えずにいられないのね。

さて先日は、先生から個展のご案内状をお届けいただきまして、早速に青山の『きりやま画廊』に出向いてまいりました。先生の新作に出逢える悦びに胸躍らせながら……。至極楽しい語らいのひとときを画廊主ご夫妻としばし過ごしまして、先生の新作の油彩【たわむれて】を一点頂戴いたしました。その折り、我がままと申しまして、わざわざ額縁を、ちょっとお値段の張る別のものと入れ替えていただきましたもので、絵の印象が、ぐんと素晴らしくゴージャスになりましたの。

最近、ギリシャ語に‘精神の明るさ’というのがあることを知りましたせいか、あの絵の闇夜に充満する、その途轍もない明るさに深く魅せられまして、とてもとても嬉しゅうございました。これは、モンゴルかどこか異国の、先生がいつか取材旅行先でご覧になられた風景なのでしょうかしら。ふと、かつて私の幼少の一時期に暮らした北海道の大雪山の麓の原野の風景が呼び覚まされましたが……。視界を遮る

ものとしてない、地平の果てまでに漆黒の闇が横たわる雄大な景色、それは真に静謐で‘無音’の世界。でも、人のぬくもりを拒むような荒涼とした原野に、なぜか一軒の家があり、煙突からは煙がたなびいている。そして楡の木がところどころに屹立している辺りに、一人の赤い靴を履いた女の子が手を大きく広げ、今まさに大地を蹴って宙に戯れ踊り狂わんばかりといった、不思議にも解放感と愉悦に満ち溢れたものでした。私どもは、時折とりとめもない我が身の卑小感に押し潰されそうなとき、その重圧に耐えかねて、でも逆らわんとして飛翔せんとあがきもがくもの。だからこそ、何かに烈しく憧れ、追い求めることになりましょう。それは‘光’といいますか、‘救い’といいたいでしょうか……。

実際には、日頃都会のマンション暮らしなどしてますと、窮屈にもちっぽけな箱庭のような空間に身を閉じ込められているわけでして……。しかしながら、私の心は夜な夜なこの絵の風景の中に引き込まれ、光を胸にひしと抱きしめながら、どこまでも浮遊しておりますような……。こうした折々の気まぐれの暫しの‘逃避行’が、今の私の大いなる慰めでございますのね。誠に嬉しゅうございます。有り難うございました。

これからも、ますますいい御作を手掛けてくださいますように。またまた新たなご縁をいただけますことを期待致しております。ではいづれ又。どうぞご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1998年11月14日

Prof. 植田 重雄先生

此の度はアイコンに誘われて、伊豆高原へと、先生並びに《宗教芸術研究会》のお仲間の皆さま方と旅をご一緒することになりまして、久々に胸踊る気分しております。当日の電車の指定席の切符を幹事役の〇〇さんに頼まれまして、私が手配致しましたので、取り急ぎ先生の分をここに同封致しました。

日頃どうも私は遠出することを億劫がる場所がありますのに、『早稲田奉仕園』での先生のご講義に触発されて、昨今、実に思いがけない、摩訶不思議ともいえる、様々な機縁をいただいております。これも偏に「植田先生がご覧になられたものは、私も是非とも見てみたい！」という一念に駆り立てられてなのであります。先生が宗教芸術・宗教民俗学者として長年研鑽を積まれておいでで、その折々に遭遇されたさまざまなテーマのごく片鱗にすぎないとしましても、これ迄にお話戴きました数々、例えばリーメンシュナイダーの彫刻、奉納画、ガラス絵、石仏、埴輪などなどの魅力溢れるものたち、それは私にとりまして、どれもこれも、烈しく心を揺すぶられるものであります。

実は、先日も大宮にあります「埼玉県立博物館」まで足を延ばしまして、《女性にはわーその装いとしぐさ》展を見てまいりました。もうとてもとても素晴らしく、感激いたしました。

以前、新宿の「朝日カルチャーセンター」で芝山の『埴輪館』について先生からご講義をいただき、一度是非訪ねてみたいものと思っておりましたが、まだその機会を得ませんでして、ですから此の度の埴輪は私にとってまったくの初体験でした。死者を弔う葬祭の具なのでしょに、何とも愛らしく、でもよくよく見ればどこか無気味というか底知れぬ霊威が秘められているようでもあったり……。いずれにしても最近あれこれ仏教関連の本を読みながら、私が‘代受苦’というものに痛くこだわっておりますためか、古来より‘大和の女たち’が持つ悲苦を甘受する力の凄みというか、それは取りも直さず‘健(けな)げさ’でもありましようが、何故かしら言いようもなく慰めされ、そして、ああ、やっぱり女というものはかくあらねばならないのかと妙に得心させられましたような次第です。

私は心理療法家として、精神分析を専門としておりますものですから、そうした自分がこれから21世紀へ向けて日本人であり、また女であることにどのような希望を持てるのかと模索しております。それへの一つの示唆としても、埴輪は衝撃なのでした。とても嬉しゅうございました。

これからも尚いっそう、先生のお話から多くの刺激をいただき、啓発されてまいりたいと願いたしております。私ごとながら、輸入文化としての精神分析の導入にあたり、それがこの日本の土壤に根ざしてゆくことの多大なる困難、そして底知れぬ昏迷を覚えます折に、先生の東西の文化的障壁を遥かに超絶した審美眼が、必ずや私にとって自分の行く末を

照らし導くところの‘前照灯’としてあるものと確信いたしておりますような次第です。

それでは、11月29日朝9時35分発の[伊豆急行]で一緒させていただきます。尚、先生の早稲田大学当時以来の教え子でいらして、先生から薫陶を受けられた〇〇宇花さんと〇〇玉枝さんも一緒です。皆さん、私にとりましても、心頼もしい、とても嬉しい道連れです。心待ちに致しております。

では、ご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1999年4月25日

Prof. 吉野 要先生

先日は夜分突然にお電話差し上げ、ご無礼申し上げました。本出祐之先生の訃報に接し、なんとも気持ちが落ち着かず、ざわざわしたまま、お継りしたような次第でしたが。お話できましたこと、とても嬉しゅうございました。あの後しばらくして、ごく自然にお亡くなりになった本出先生が偲ばれて、涙が出てまいりました。ようやくに泣けた自分にどこかほっと安堵する思いがありましたのね。

訃報をもらった折りは、ああ、親を喪う前に大事な人をなくしたという哀しさはありましたものの、どこか分別が、それを覚悟の事として受け止めていて、だから致し方無しということにしていたのでしょう。涙することはありませんでしたの。‘感傷’は、私のもっとも嫌うもの

というのが日頃からございましたもので…。

でも不思議なことに、決して顕にはしなかったはずの私の哀しみが、おそらくそれに吉野先生が深く寄り添ってくださったからなのでしょうかしら、先生のおっしゃる言葉に照らされて、それはまるで鏡のように、掴みどころのない、ぼやけたままの自分の中の哀しみが徐々に焦点づけられ、やがて鮮明に意識に映し出されて行ったのだという気がしてなりません。そして、それまで見えなかった哀しみが、私の中で感じられ、だから涙したのだとも…。哀しむことができたということは、心が‘対象’を得た、取り戻したということにもなりましょう。たとえそれが此の世的に申せば既に喪なわれたものであったとしても…。さらには、そのようにしてようやく、私自身が改めて本出先生に対して‘小さき者’、つまり‘子ども’になれたように感じられまして、それがとても喜ばしい。素直に今はそう思われますのね。誠に先生のお陰です。

吉野先生がお電話でおっしゃってらした「(本出先生は)人間らしく生きてゆくことを教えてくれる人だった」というお言葉どおりに、それは今尚私の裡でもそうなのだ感慨を深めながら…。そしてまた、「自分が育ててゆこうとするときに確実に出会ったということには違いない。それを大事にしたいね」と、先生がご自身の我が事として、また私への呼び掛けとしても語ってくださったことを忘れません。そのお言葉を我が心の裡に抱いてまいりたく思っております。

こんなことを申せば唐突に聞こえて驚かれるだろうと思われそうですが、吉野先生とお話して、その後でふと思いましたの。

女って何て浅はかなのかしらって。どんなに貰っていても、「もっともっと…！」というのがある。それはそれは執念深く、欲深いものだって。そんなことをあれこれしみじみとね。実を申せば、私はそれ迄まるで気づいておりませんでしたけれども、本出先生に腹を立てていたみたいなのです。私に一言の‘挨拶(!)’もなしに逝ってしまわれたって…。そうかそうか、なんだ、なんだ…それはないじゃないの！って…ね。これは言わば私の僻み根性。それが吉野先生の淡々とした述懐のおことばを聞きながら、私の僻みはいつしか宥められていったんだと思いますよ。ああ、そうなんだって、‘フェアな魂のひと’であった、本出先生から貰ったものの大きさを改めて実感できたのです。ああ、それで充分なのよねって。そして己れを恥ずかしく思ったわけです。それで‘駄々っ子’はやめることにしましたわけ…。

もうひとつ更に申せば、僻みも実のところ負い目の裏返しでもあるのです。私は休暇ごとに両親のもとに帰省して過ごしておりまして、そうした折りに父親に伴われてよく京都に出歩きます。骨董市とか美術館巡りとか。写真機をぶらさげて歩く父親の後ろから付いてゆきながら、時折本出先生のことをふいと思ひ出すことがありましたの。どうしておいでなのかと気掛かりで。お子様はおありでなかったりとやら寒々しい噂のみで、お寂しいのではと気遣いながら…。でも手も足も出ないといった窮屈な自分なのでして、お訪ねしても面倒がられるのではと変に遠慮したり…。吉野先生が森野先生とご一緒に本出先生のご自宅を

しばしば訪ねられたとのことを伺い、ああ、いいんだなあ、そんなに自由なんだって……。結局は何をしてあげられたらいいのかと考えあぐねておりましただけで。阪神大震災の折りもそう……。教え子のどなたかが手助けしておいでと伺い、安堵しましたけど。私の出番はないと言いながら、ついに出番をつくらなかったということが心にしこりとして残る。Mrs.I.M.さんと、いつかご一緒に本出先生に会いに行きましょうねと約束してたのに……。だから此の度、彼女は私に「ご免ね」と謝られた。でも、でも、本当は私が……。と、そんな詮無き繰り言になりますの。

さてさて、吉野先生は私にとっていつも‘いい人’でしたのね。「愛知県女大」で卒論指導でお世話になったとかいうだけではなく、それで恩義のある方というのは勿論ですけどね。時折姉・Q子と噂をすることがありましたのよ。私が「吉野先生っていい方ねえ」と言うと、滅多に人を誉めない彼女が、「そうだよ……！」と断固そんなの当たり前だって感じで言うのでしたのね。でも、此の度先生とお話しして思ったんですけど、吉野要先生って、私の中では本出先生の傍らにおいでの方で、若かりし頃の(つまり未熟でお恥ずかしい限りの)私を見知ってくださっている方といった域を出ない、そうした‘いい人’でしかなかった。何て勿体ないのって……。それが、ちょっと変に聞こえますかどうか、‘血族(同族)’、そんな言葉がひよいと浮かびましたの。同じ絆(縁)に生きる同志と言いましょうか。‘靈的な同胞’。そう言えば「タヴィストック・ファミリー」という言葉もあったな、とふと懐かしく思い出されました。自分と似た

ものを嗅ぎあてたといいますか、まるで‘兄なるひと’を見つけたみたいなの……！ そういう物言いは、陳腐に聞こえますかしら？ 本当のものなど絶対に外に出すものかって、先生はおっしゃった。確かにね。だから、いずれそのうち、極楽トロボの顔をして、「愛知県立大学・社会福祉学科」の先生の研究室の窓から眺められるという御嶽とやらを拝見しにお訪ねすることに致ましょうね。その節はどうぞよろしく。

でも本当に大袈裟ではなく、先生と今回お話出来ましたことで、私はとてもとても救われた気がしてなりませんの。とても嬉しくそして有り難く、深く感謝申し上げます。

では、ご機嫌よう。

山上 千鶴子



2001年11月1日

Dr. A.S.先生

先日は、本当にたくさんの暖かなお心遣いの品々を頂戴致しました。何とお礼申し上げて良いやら……。先生のお手紙を拝読し、深い感銘を覚えながら、「ああ、本当に良かった、良かった……」と、何度も呟いておりました。

『みずさわ画廊』からの「高田博厚展」の招待状を手にも早速に参じまして、選りすぐりのなかでも格別私の気に入った【小さいトルソ】のブロンズ像を戴くことになりました際、ふと何故かしら先生のことが思い出されまして、先生が或る青春の一時期に邂逅されたとおっ

しゃってらした高田博厚氏、その懐かしき思い出のよすがに、もしかしたら私以上に、これらの作品を、先生は欲されておいでなのでは…と  
うか、むしろ必要とされていらっしやる…かも知れないと、そんな閃きが一瞬頭を過ぎりましたの。特に今回の展示即売の品々は高田博厚氏の遺品で奥様が保管してらしたものののだと、日頃懇意にしているという画廊主から伺ったから尚更なのでした。このまま黙っていれば、私の気持ちが済まないように思われまして、どうしたものかと躊躇したのですが、思い切って『みずさわ画廊』のご案内状を先生宛に投函してしまいましたわけなのです。

此の度出展の作品たちを写真に撮らせて貰う為に再度画廊を訪れましたら、画廊主からDr.A.S.先生ご夫妻がわざわざお越しになられて、【ロマン・ロラン像】を一点お買い上げなされた由を大喜びで報告されまして、唯々びっくり致しました。それは良かったことと喜びながらも、内心ちょっぴり押し付けがましいことをしたかしらと恐縮致しておりました。先生よりのおたよりを戴きまして、ようやく安堵致しました。真実、先生は先生が心底欲しいと願われておいでだったものを正しく手になされたのだと知ったわけですから…。

そして、ふとこんなことを思いましたの。先生は改めて‘親なるもの’を取り戻されたんだって…。自分は決して‘親なしっ子’などではなく、自分を見守ってくれ、そして導いてくれる‘親’がいてくれることを再確認なされてましたような…。先生の綴られた文面には、実際のところ誰かの‘子ども’であることの幸せな

思いに溢れておりましたもの…。実にこの世に、人の親になることの貴さ以上に貴いものはありませんし、又、誰かしら人の子どもであることの幸せ以上の幸せなど無い、私は常日頃そう考えておりますわけで…。勿論、それはしばしば見失いがちな真実でもあり、親子関係なる様々な現象は、それとは裏腹に混迷やら厄介やら、まさに痛苦以外の何ものでもないのですけれども…。

自分が 誰かの‘子ども’であった幸せを日々思い出させられるような‘形見’というか‘証し’を、我々は我々の未来を生き抜くために是が非でも必要としているように思えてなりません。そして今まさに先生は、ご自分を支えるべく、そうした‘お形見’を手になされたのだと、私は理解致しております。

実は昨年でしたか、ちょうど今頃或る高価な買い物をしましたの(私の誕生日の祝いという口実にして…)。それは「西谷結城」という黒磯にお住まいの陶芸家のお作で伊賀焼きの花入れなのでした。それは大層どっしりとした重厚な風格があり、それを見て私が「いいですねえ！」と申し上げましたら、「そうでしょ、‘古武士’みたいでしょ?!」と彼が即座に返答なさって、まさに私がそれを見た瞬間に思った通りを言い当てられましたの。ああ、これって本出祐之先生だあ…!と一瞬思ったのです。本出先生というのは私の恩師なのですが、ロンドンに英国福祉行政の視察にお越しの際、あちらでお逢いなされた方に、その彼の風貌からして「古武士(サムライ)」のようだと言われたと、確かご本人から伺った記憶があったものですか

ら…。その本出先生は、一昨年お亡くなりになりました。突然に、でした。何の看取りも許されず、お葬儀もなしに。そして今尚、墓参も叶わず、私は深く哀しんでおりました。唯、私と同じく彼を師と仰ぐ私の先輩格に当たる或る方から、「本出先生の一番の自慢は、チズコ、貴女なのよ」と言われたことが唯一慰めなものでした。私は、おそらく彼がなりたかったもの(つまり精神分析家)になってるのではないかしらと思われるもの…。でも彼は‘論理(口ゴス)の人’であり、ご自身に厳しい方でしたから、私情をむやみに吐露なさる方ではありませんでしたので、かつての教え子の一人としての私に対しての気持ちなどあれこれ忖度することは恐れ多く、ただなにやら心寂しい想いでおりました。それで、まあ、そんな内緒ごとを心密かに抱えながら、その頂戴した伊賀焼きの花入れ(銘:【千寿】)を我が住まいへと招き入れ、ようやく私の心は慰められたのです。それを本出先生だと思うことで…(！？)。これって、些かフェティッシュですかしらね。

私の両親にとって、私は‘自慢の娘’であるように、本出先生にとっても、更にはDr.メルツアーにとっても、どうやら私は‘自慢の娘’たらんとしているらしいのです。ユダヤ系アメリカ人でいらっしゃるDr.メルツアーは、私が日本でヘブライ語を学んでいるとお聞きでしたら、さてどんな顔をなさるか、それがちょびり愉快にも思えるのです。私は、誰かの子どもでいられる幸せを徹底して掴んで離すまいとしているらしいのです。ですから、先生のお気持ちにも通じたわけなのでしょうかしら？高田博厚氏の‘ご自慢の息子’におなりになろうと願わ

れること！ そうした思いが、おそらくこれからの先生の行く末を水々しく潤い、かつ豊かにしないはずはありませんでしょう。

私の【小さなトルソ】は唯今のところ食卓の上に置かれてありまして、シクラメンの鉢植えのお隣りです。シクラメンの淡いピンク色がブロンズ像と実に似合っております。更には先生からいつぞや頂戴しましたグレン・グールドのピアノ演奏が絶妙に調和しまして、そんなことに一人悦に入っておりました。それが又今回も先生から得難いCDを新たに頂戴しまして、ああ成程、これもいいわ、似合うわねって、私の【小さなトルソ】に話しかけておりますような次第です。誠に有り難うございました。

それから今回お届け戴きました高田博厚氏著「ルオー」ですが、先生のご愛蔵なされてらしたものでしょうに、私などが戴いて本当に宜しいのですか？ 勿体ないと、恐縮してしまいます。嬉しいです。いいですわねえ。時折本当に久々に、真に珠玉のような言葉に触れられます。それに“純粹にして希有なる魂たち”の出会い！ モロオとルオーが実に感銘深い。羨ましいほどに…。

最後に先生がお勧めくださった「清春美術館」並びに「豊科美術館」所蔵の高田博厚氏の諸作品は、実は「静岡市民ギャラリー」やら「三鷹市民ホール」で特別展が催された折りに、一応拝見しております。でもおそらくは清春なり豊科なりを直に訪ねるのも嬉しいですわね。今日はここ迄に致します。いずれ又、折々におたより差し上げたく存じます。ご機嫌よう。 山上 千鶴子

.....